

飛行機に乗りたくて……

司会 中島さんは、琵琶湖の変化を長いあいだ、空から映像にしてこられたのでしたね。この博物館の常設展示にも、赤潮の写真（写真1）を使わせて貰っていて、たいへん好評です。

中島 あれは、一九七八年五月二七日の朝に八尾空港を飛び立って、木浜の上空で撮ったものです。撮影するのに窓を開け、高度を下げると、魚の腐ったような臭いで、水も茶色いし、ショックでした。
川那部 いやあ、それも感じるような見事な写真です（笑）。ところで中島さんが、琵琶湖の写真を空から撮り始められたのは、いつ頃ですか。

中島 それをここに持ってきました（写真2）。一九六六年一月。この年の六月から飛行機の操縦を習い始めて、六か月目くらいです。琵琶湖大橋が、まだ架かっていないでしょう？

川那部 ああ、ほんまや。これと同じ角度で見るとはないけど、やはり今の状態とは、だいぶ違いますね。

中島 琵琶湖の変化を意識して撮り続けようなどは、その頃は思っただけではないのです。

この当時は、ヨシ原がほんとうにきれいで、まさに「緑の絨毯」でした。そういうところを低空飛行するのは、楽しかったです。野洲川の付け替え工事は、もう始まっていたんですが、元の川筋、いわ

ゆる北流から南流にかけての川口も、きれいな景観でした。今思えば、あの頃にもっともつと撮っておけばよかったのですが……。

川那部 赤潮が出たのは、この最初の写真を撮られたときから、十年以上後ですね。季節も正反対で……。

中島 ええ。空から写した最初の頃は、琵琶湖がこんな風になるとは、思ってもいなかったです。一九六九年に大津の青年会議所に入って、それからすぐに、環境問題の映画を作りました。そのとき、京大の臨湖実験所におられた根来健一郎先生が、「諏訪湖も一度見に行ったら」と、教えて下さったのです。緑色のペンキを流したような湖面を見て、たいへん驚いたのですが、まさか琵琶湖にアオコが出るなどとは思わずに、諏訪湖と琵琶湖をくらべた映画を作りました。『青の輝き』という作品です。ところが、それから十年もしないうちに赤潮が出て、そのあとにアオコが出た。

川那部 アオコの出た最初は、たしか一九八三年でした。それはそうと、赤潮の写真（写真1）の後も、ずっと記録を続けてこられたんですね。

中島 ほんとうのところは、飛行機の操縦が好きですから、最初のうちは、空で遊んでいたその結果です。

川那部 いやいや。

中島 ただね、空から見ていたところ、「琵琶湖総合開発事業」が本格的に始まった一九七九年頃から、湖岸がどんどん変わっていく

琵琶湖の今昔

空からの映像をもとに



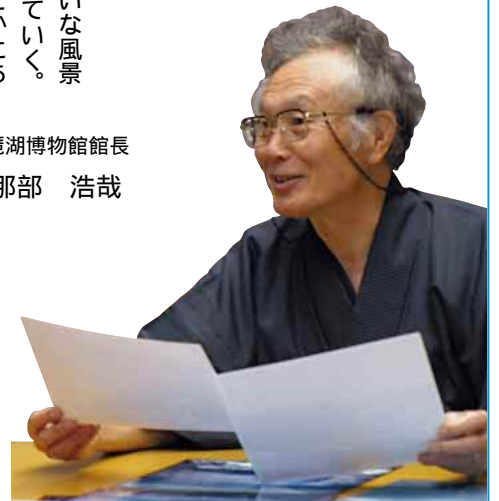
写真 - 2 : 1966年12月の南湖。近江大橋や矢橋帰帆島はまだない。



写真 - 1 : 守山市木浜のエリの南側（写真左上）に、赤潮で黒ずんだ水が写っている。

2004年10月26日(火) 琵琶湖博物館館長室にて
司会進行 / 芳賀裕樹

時々伺っただけ
の私ですら、い
ろいろなことを
思い出します。



琵琶湖博物館館長
川那部 浩哉

のが判るわけです。きれいな風景がなくなり、ヨシも消えていく。子ども頃から報道写真とかにアオコが写っていたので、記録として残さなければと思ったのです。それを映画にしたのが『俺の見た琵琶湖1980』です。このあと、同じようなタイトルの映画を、何本か作っています。

湖のほとり、その岸辺

中島 琵琶湖博物館がいま建っている烏丸崎が、とくにきれいでしたね。このへんはよく飛んでいましたから、埋め立てられて博物館ができるまで、ずっと撮ってあります。

川那部 最初の頃には、エリがたくさん写っていますね（写真3）。

中島 そうです。ほんとうは、博物館がもつと内陸にあつて、その前景にこれが残っていたら、もつとずっと良い景色だっただろう、もつと良いことをしたなあ、と思っています。あの時代には、そこまで考えつかなかつたかもしれません……。

川那部 ほんとうに、すみません。

中島 私はじつは、烏丸崎にはゆかりがあるんです。祖母の里が小津神社の近くの杉江（守山市）です……。この頃は、夏休みになると浜大津から船で遊んで、ノシルメを食べながら乗っていると、烏丸崎の切り通しあたりには、両側にヨシ原が密生していて、スクリーンをこすり、船はヨシ原にこんこんと衝突しながら、行ったものです。そのときの印象では、杉江はヨシ原ばかりで、それ以外には何もありませんでした。守山で小さいカメラとホテルを貰って、船に乗って帰ったのが夏休みの思い出です。

ところで川那部さんが、琵琶湖を調査されたのは、いつ頃のことですか。

川那部 一九五五年頃に湖北へちよつと行きましたが、比較的良く動いたのは一九六〇年代の前半です。

中島 そうすると、同じような風

景を見たかもしれませんが。

川那部 ヨシ原はほんとうにきれいやった。そのころ烏丸崎へ来るのには、陸からではなくて、私ももっぱら船を使っていました。

中島 長靴をはいていても、柔かい泥が深く、長靴の上までその中へ入ってしまいますからね。尾上(湖北町)とか姉川の川口(びわ町)とか、いろんな場所がそうだったように覚えてます。

川那部 尾上の港は川の中にありました。どこでも小舟が、交通手段としてもたくさん使われていました。

それはそうと、このように次々と同じところが撮られているのを拜見すると(写真 4)、時々伺っただけの私ですら、いろいろなことを思い出しますから、そこにずっと住んでいらっしやる方々には、感慨深いものがあるでしょうね。

多様な使い方、一つの使い方

中島 この博物館に来て、川那部さんのお話を聞くのですが、印象に残っているのがあります。それは、水辺はぐちゃぐちゃとしているし、自然には、きっちりした境界線はない、というものです。
川那部 ええ。以前の岸辺は、名まえのとおり辺(べ)、つまり「あたり」でして、陸から湖の中央まで連続していました。水ぎわも上下にも横にも大きく移動して、田んぼと湖も、季節によつては「行け行け」になってましたし……。自然はとにかく、連続してい

るんですよ。

中島 田んぼでもみんな、遊んだりとかしていましたね。

川那部 京都の町中育ちの私でも、水が落ちた秋の郊外の水田では、イナゴを捕まえました。水田というのは、米を作るだけの場所ではなく、とくに琵琶湖の周りの田んぼは、魚など「おかずとり」の場所でもあったのです。湖岸も同じで、遊びやらなんやら、さまざまに使ったものです。

中島 大津市の長等(ながら)小学校でしたから、プールはもちろんないし、柳が崎まで泳ぎに行きました。こえの臭いのする田んぼのあぜ道を、くねくねと歩いて行くのも楽しみでしたし。

川那部 一九六〇年代の終わり頃に、堅田に奇妙な建物ができて、聞いてみると室内プールやと言います。琵琶湖の岸に、なんでわざわざプールを作るのかと、内心いぶかったもんでした。あの頃から、「湖岸では泳げない」という意識が出て来たんですね。

身近な風景をこそ大切に

中島 航空写真だけでなく、街の風景も、山や人も撮ってきていますが、それを見直してみると、湖辺だけではなくて、多くのところが変わってしまったのを感じます。これは余呉の北のほう、高時川の上流の鷺見の集落です(写真 5)。四十年以上前の写真で、右手前の二軒だけがまだ住んでいらつしやいましたが、今はもう、こ

館長対談



写真 - 3 : 1977年ころの烏丸半島と赤野井湾(手前)。鳥のくちばしのような三角形の付け根に切り通しがあった。



写真 - 4 : 旧高島町乙女が池付近。かつては白い砂浜が続いていたが、国道と消波ブロックが変わった。



写真 - 5 : 余呉町鷺見の集落 (写真: 中島省三氏撮影) 写真 - 5 以外は琵琶湖博物館所蔵)

の村そのものがありません。

川那部 うしろの雑木林もだいぶ荒れた感じですね。私はその頃はアユの調査で、京都府北端へ行つてましたが、この川の上流には、二、三軒だけの村落がほつぽつあって、山も野も川もどこもなかなか見事な風景でした。小学校へ通うのに片道一時間以上も歩くような、不便なところでしたが……。今は全部廃村になって、自然はかなり荒れてしまってます。

中島 里山だけではなく、その奥山もひっそりめぐって、一つのものとして成り立っているのが、琵琶湖です。そのすべてが、残念ながら変わってしまったんですね。珍しいものではなくて、何気ないようなものの変化こそ、大きな問題です。けれども、なんでもないもの、ほんとうに身近なものへは、なかなか目が向けられなかった。私にしても、それに気づいて撮り始めたのは、ここ二十年ぐらいのことです。

川那部 琵琶湖博物館へは、ぜひ浜大津からの船に、片道は乗ってほしいのです。陸の側からだけでなく、湖の側からも岸辺を見る。また、速く動く視点と遅く動く視点との、双方が必要だと思つてゐるんです。中島さんはそれに、空からのもつと速い視点まで入っているわけですね。

中島 空からでは、例えば水質の変化は判り難い。赤潮やアオコを別にすれば、みな、ある程度きれいに見えます。しかし、湖岸の変化ははっきり見えるわけです。琵琶湖総合開発事業が進んでいたあいだは、毎年飛んでいないと、その変化が追えませんでした。最近はやつと変わる早さが減ってきたのですが、少なくとも二三年に一度は、これからも琵琶湖を一周して飛んで、撮影を続けようと思つています。

フリーカメラマン・映像作家

中島 省三氏

1940年滋賀県彦根市生まれ。1967年、小型飛行機自家用操縦士免許を取得。熱気球のライセンスも持ち、空からの撮影を得意とするフリーランス・カメラマン。映像作家として多数の作品を手がける。

琵琶湖の変化を意識して

撮り続けようなどとは、その頃は思つたわけではないのです。

